

正倉院の筆と書跡から中国書法を見直す

橋 本 貴 朗

1. はじめに

平成28年（2016）～令和元年（2019）に実施された正倉院宝物の筆（以下、正倉院筆。挿図1）に関する特別調査の成果については、本紀要前号の「正倉院宝物特別調査 筆調査報告」にまとめられたが、その大要を稿者なりに整理すれば、次のようになる^(註1)。

- ・先の毛材質に関する特別調査で示された正倉院筆の構造^(註2)について、より詳しく確認・解明した。
- ・正倉院筆（有芯筆）の構造は、滋賀県高島市の筆匠・攀桂堂（藤野雲平氏）に製法の伝わる巻筆の構造とおおよそ同一であることが判明した^(註3)。
- ・これまでの特別調査の知見を踏まえた藤野氏、向久保健蔵氏製作の復元試作品（試作筆、挿図2）による揮毫を行い、正倉院筆が十分に実用性を有することを明らかにした。
- ・試作筆による揮毫（臨書・摸書）を通して、正倉院筆と正倉院の書跡・文書との関係を検証・考察した。

三点目の正倉院筆の実用性を確認できたことについては、従来、装飾品・鑑賞品としての性格を重視する向きもあり^(註4)、今回の調査の大きな成果の一つといえよう。

有芯筆とは、文字通り芯のある筆のことで、現在一般に用いられている芯のない筆（無芯筆）とは構造を異にする。その製法は、まず芯毛（第1営）を紙で巻き、その上から毛（中着せ・第2営）をまとうせていき、それをさらに紙で巻いていくというもので、最も外側には化粧毛を被せる。中着せは、層を重ねることもある。



挿図1 中倉37 筆 第3号・第9号・第16号（左より）



挿図2 試作筆（左：藤野氏作製、右：向久保氏作製）

試作筆の揮毫を通して確認された有芯筆の特徴としては、毛にいわゆる腰が強く感じられることが挙げられる。また構造上、書くことの有効範囲（毛の下ろせる部分）が限られており、穂先の含墨量は少ないとする見解もあるが^(註5)、同程度に毛を下ろした無芯筆よりも多い印象を受ける。これは、兎毛（紫毫）によるものとも考えられる^(註6)。兎毛は断面がダンベル状をしており、その中央の窪んだ部分に墨が貯えられるのであろう。

有芯筆による書の特徴としては、腰のある毛の弾力がもたらす抑揚のある筆線を上げることができる。これは、第2営以下の中着せが芯毛に力を加えることによると考えられる。従来は逆に、あまり抑揚のある線にはならないとする見方もあった^(註7)。

また、極めて細い筆線が頻出することも特徴といえる。こうした細線は兎毛を用いた際の特徴でもあるが、やはり第2営以下の中着せが芯毛に力を加えることにより、いっそう穂先・命毛の働きが顕著（穂先が利く状態）になったためと考えられる。相対的に、筆線の太細の差も大きくなる。

筆線の割れも特徴として挙げられる。第2営以下が何らかのはずみでまとまりから外れることで生じたものと考えられる。ただし、兎毛は先端部分のほう膨らんだ紡錘形になっているため、ばらけやすく、その特徴ともいえる。有芯筆の場合、芯毛が紙で巻かれ、第2営以下の中着せによって固定されることで毛の可動域が狭まることによって、割れがより現出しやすくなっているように思われる。

こうした特徴は、正倉院の書跡・文書に散見され、それらは有芯筆で書かれたものと推測される。正倉院筆そのもので書かれたと断定するものではないが、有芯筆である正倉院筆もそれらを書き得る機能を有していることと思われる。

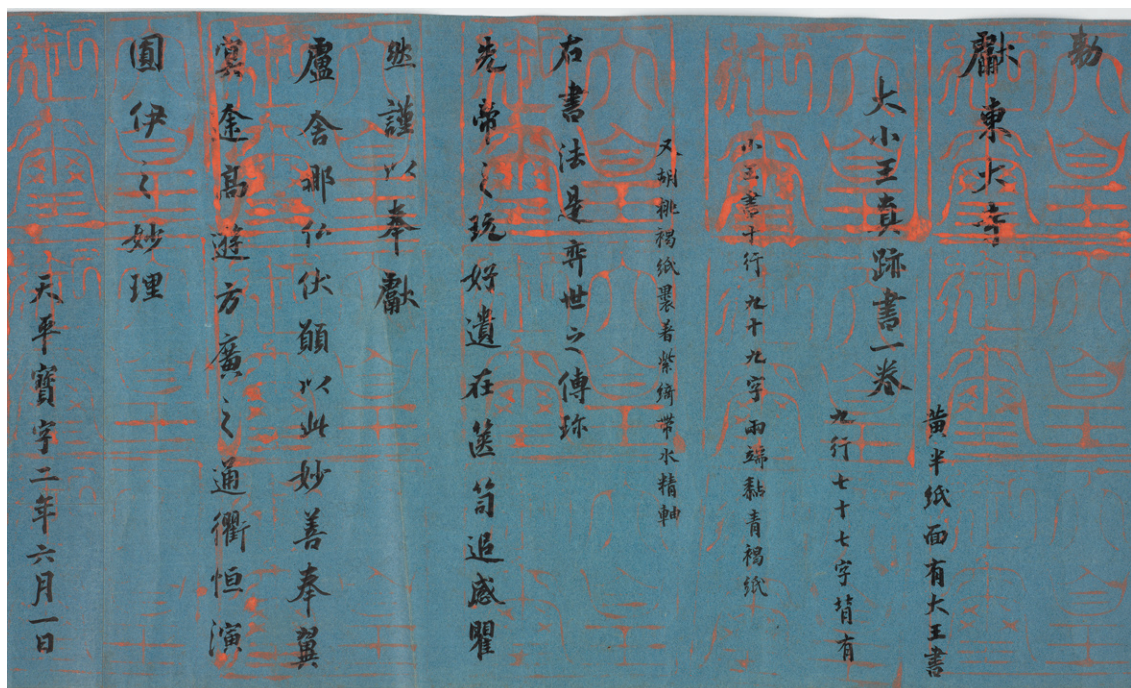
以上を確認した上で、本稿では、正倉院の筆と書跡から、中国書法の再検討を試みる。本紀要前号の荒井利之氏の「正倉院所蔵の巻筆と書蹟」^(註8)における指摘と重複するところもあるが、東大寺献物帳のうち大小王真跡帳、藤原公真跡屏風帳、聖武天皇（701－756）筆の雑集の三点を取り上げて、それらに類似する中国書跡とあわせて、少しく丁寧に見ていくことにしたい。

2. 大小王真跡帳と藤原公真跡屏風帳から蘭亭序を見直す

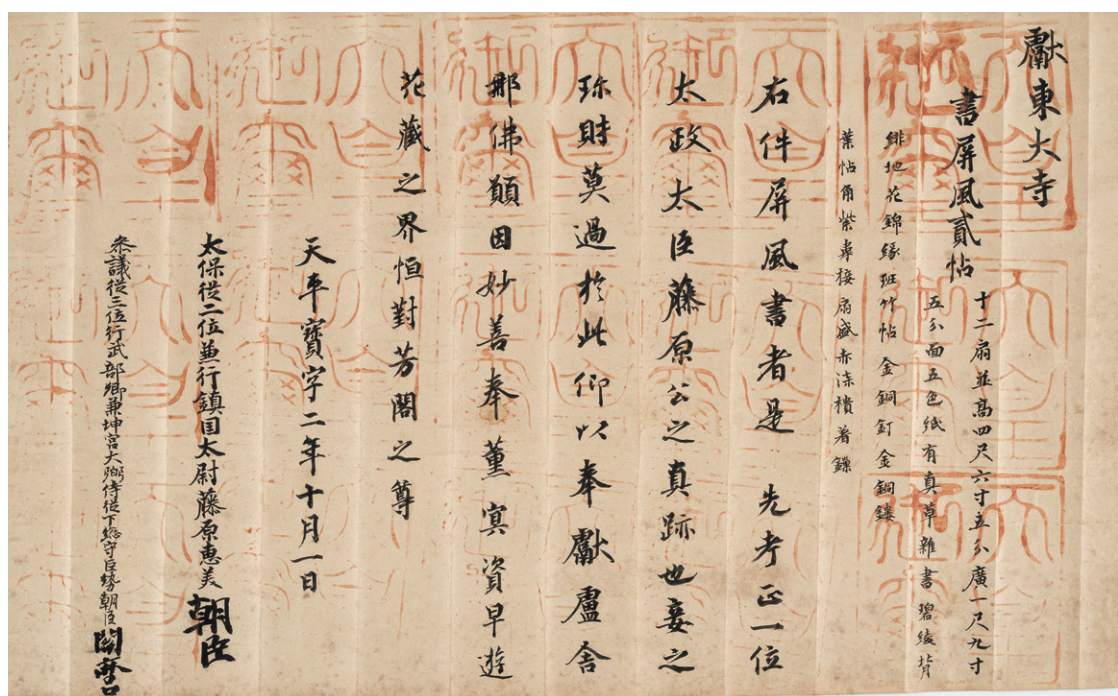
大小王真跡帳（挿図3）は、天平宝字二年六月一日献物帳（北倉160）のこと。天平宝字2年（758）6月1日に、聖武天皇遺愛の王羲之（大王。303－361、異説あり）・王献之（小王。344－386）父子の真跡一卷を、東大寺毘盧遮那仏に奉献した際の目録である^(註9)。

藤原公真跡屏風帳（挿図4）は、天平宝字二年十月一日献物帳（北倉161）のこと。同じく天平宝字2年の10月1日に、光明皇后（701－760）の亡父・藤原不比等（659－720）の真跡屏風二帖を、東大寺毘盧遮那仏に奉献した際の目録である。

ともに書体は行書で、抑揚のある弾むような起筆、起筆部分や筆路に沿って現れる極めて細い筆線などの有芯筆による特徴を見ることができる。両帳、有芯筆で書かれたものと考えられる。



挿図3 北倉160 大小王真跡帳



挿図4 北倉161 藤原公真跡屏風帳

この二帳については、昭和31年（1956）～昭和34年（1959）に実施された「書蹟」に関する特別調査の報告である『正倉院の書蹟』において、神田喜一郎（1897－1984）が同一人物の筆跡（同筆）であろうと推測している。その筆者については、「いわゆる集王聖教序あたりを学んだ書家に相違ないが、楮遂良の枯樹賦などとも相通じたところがある」と指摘する^{（註10）}。集王聖教序は、王羲之の字を集めて作られたものである。

杉本一樹氏は、全体の雰囲気や気脈の流れといった点において、王羲之の喪乱帖（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）や孔侍中帖（前田育徳会蔵）との共通性を指摘している。杉本氏は、献物帳の各帳の書風・書体について、それぞれの内容に応じて相応しいものが選択されていると説き、大小王真跡帳については、本帳により奉獻された王羲之・王献之父子の真跡が行書であることに由来すると推測している^(註11)。

荒井氏は、王羲之の書のなかでも集字聖教序（集王聖教序）、興福寺断碑、蘭亭序八柱第三本の特徴との合致を指摘している。

両帳の書風・書体については、王羲之風の行書で書かれているとする点では一致しており、稿者もその見解に従うところである。なお、杉本氏も荒井氏も、大小王真跡帳と藤原公真跡屏風帳を同筆と見ている。

以下、王羲之の書のうち蘭亭序に着目し、著名な八柱第一本・第二本・第三本（すべて北京・故宫博物院蔵、挿図5）を取り上げて、大小王真跡帳、藤原公真跡屏風帳と比較してみたい。

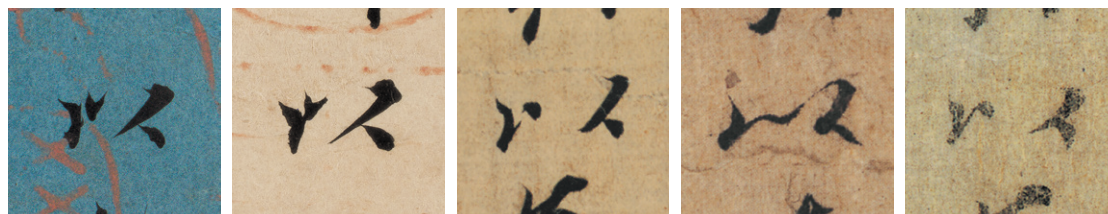
蘭亭序は、東晋の永和9年（353）3月3日、知友・門弟を会稽山陰の蘭亭（現在の中国・浙江省紹興県）に招いて祓禊の後、曲水の宴を催した際に成った詩集の王羲之による序文である。行書の傑作として名高い。真跡は、唐の太宗（598-649）没後、その昭陵に殉葬されたと伝えられる。



挿図5 蘭亭序（左：八柱第三本、中央：八柱第二本、右：八柱第一本）

八柱とは、清の乾隆帝（1711－1799）の収蔵品中の蘭亭序とその所縁の墨跡八種を石柱に刻して円明園に置いたことにちなむ呼称で、第一本は巻末に「臣張金界奴 上進」とあることから張金界奴本ともいわれる。唐の虞世南（558－638）の臨写と伝えられる搨摸本である。第二本は、褚遂良（596－658）の摸写と伝えられる臨写本である。第三本は搨摸本で、前後の紙縫に「神龍」印の半分があることから、神龍半印本とも呼ばれる。また馮承素本ともいう^{（註12）}。

まず、大小王真跡帳と藤原公真跡屏風帳、蘭亭序のいずれにも見られる字を挙げる。



大小王真跡帳

藤原公真跡屏風帳

八柱第三本

八柱第二本

八柱第一本

挿図6 「以」字の比較



大小王真跡帳

藤原公真跡屏風帳

八柱第三本

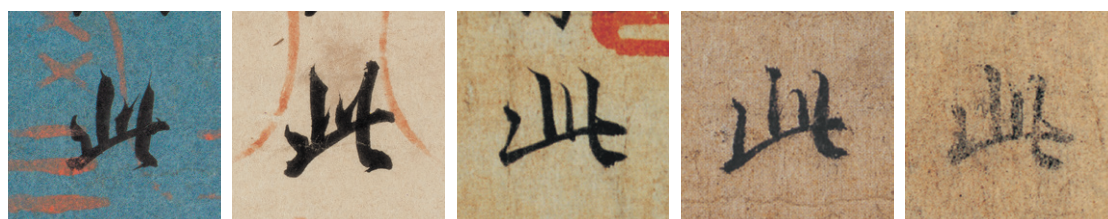
八柱第二本

八柱第一本

挿図7 「是」字の比較

八柱第一本・第二本・第三本ともに、大小王真跡帳、藤原公真跡屏風帳と字画・字形がよく似ている（挿図6・7）。

有芯筆による特徴については、「此」字や「日」字の第一画の抑揚のある弾むような起筆や、その打ち込みの前に現れる細線などのように、八柱第三本に、大小王真跡帳と藤原公真跡屏風帳との共通性が強く認められる（挿図8・9）。



大小王真跡帳

藤原公真跡屏風帳

八柱第三本

八柱第二本

八柱第一本

挿図8 「此」字の比較



大小王真跡帳

藤原公真跡屏風帳

八柱第三本

八柱第二本

八柱第一本

挿図9 「日」字の比較

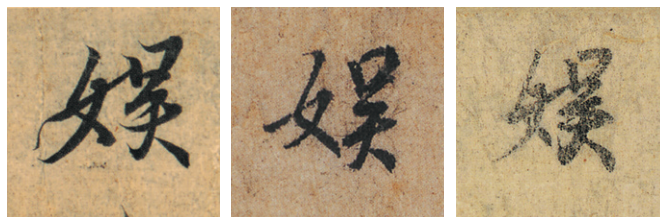
次に、女扁の字に注目したい（挿図10）。女扁の第三画の起筆部分を見ると、第二画からの筆路に沿って細線が現れている。取り上げた蘭亭序三種のなかでは、八柱第三本にのみ確認することができる。この細線は、単独で見ると一過性の筆の迷いのようにも思えなくもないが、大小王真跡帳と藤原公真跡屏風帳、蘭亭序八柱第三本のいずれにも見られることから、有芯筆による特徴と考えられよう。



大小王真跡帳

大小王真跡帳

藤原公真跡屏風帳



八柱第三本

八柱第二本

八柱第一本

挿図10 女扁の字の比較

八柱第一本・第二本・第三本では、第三本が最も大小王真跡帳と藤原公真跡屏風帳に書風が近似しているということができる。蘭亭序のなかでも、八柱第三本を挙げた荒井氏の見解に左袒したい。

大小王真跡帳と藤原公真跡屏風帳、蘭亭序八柱第三本の類似を確認したところで、改めて八柱第三本に有芯筆による特徴を探ってみよう。

第三本には、前掲の字例以外にも、起筆部分や筆路に沿って現れる極めて細い筆線が多く見られる（挿図11）。



挿図11 蘭亭序八柱第三本 細い筆線

「騁」「聽」などにおいて、短い横画の起筆がみな縦画の左に突き出ていることに疑問を呈する見方もあるが^(註13)、これらも穂先の働きが顕著な有芯筆を用いたためとは考えられないだろうか。

筆線の割れも見ることができる。「歳」「羣」「畢」「觴」「静」「同」「斂」「然」「不」「矣」「死」「亦」などの字が挙げられる（挿図12）^(註14)。



挿図12 蘭亭序八柱第三本 筆線の割れ

こうした筆線の割れについては従来、八柱第三本の搨摸本としての忠実さの現れなどとされてきたが、割れそのものが生じた理由については言及されてこなかったように思われる。第三本には、上述の通り、大小王真跡帳と藤原公真跡屏風帳と共通する有芯筆に由来する特徴が認められることから、これらの筆線の割れも有芯筆の使用によるものと見てよいのではなかろうか。八柱第三本は搨摸本とされるので、その底本が有芯筆で書かれていたことになる。

蘭亭序をめぐる古来さまざまな評価がなされているが、郭沫若（1892－1978）が1965年に蘭亭偽作説を再提起して以降、20世紀後半の中国においても激しい議論が展開された。いわゆる「蘭亭論弁」である^(註15)。一方、日本では、蘭亭の雅会から数えて28回目の己丑にあたる昭和48年（1973）、五島美術館で昭和蘭亭記念展が開催された^(註16)。その折の講演で、西川寧（1902－1989）は主に「力の均衡」の観点による様式論的な検討から、八柱第一本が最も古い姿を伝えているとした^(註17)。今日、この説が広く受け入れられているようである。

しかし、例えば啓功（1912－2005）は筆線の割れなどの細部の忠実さに加えて、墨色・字間・行間の点から、八柱第三本を原本に近いものと結論する^(註18)。大小王真跡帳、藤原公真跡屏風帳との共通性ならびに有芯筆による特徴は、第三本に強く認められる。両帳が書かれたのは、8世紀半ばの奈良時代であり、中国では唐代（618～907）にあたる。王羲之筆の蘭亭序原本にどこまでさかのぼりうるかはなお検討を要するが、八柱第三本を唐代（以前）の特徴を確かに有する優れた一本として、高く評価したい。

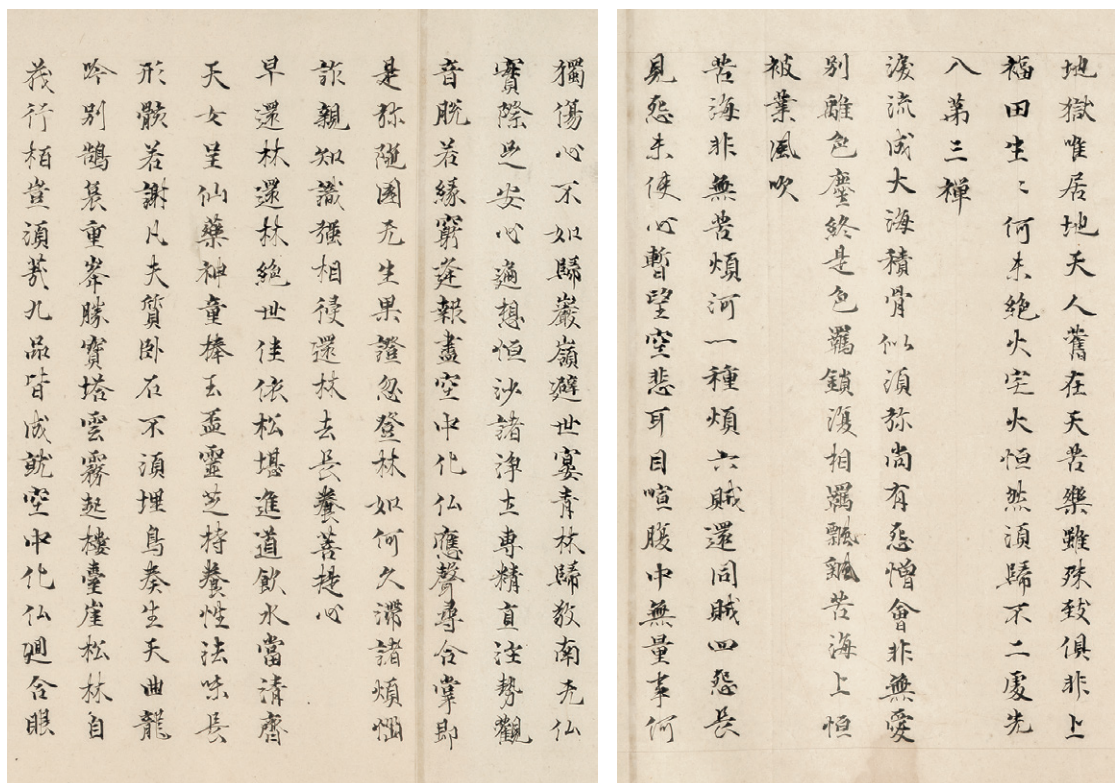
3. 雑集から雁塔聖教序を見直す

雑集（挿図13）は、東大寺献物帳の一つである国家珍宝帳（天平勝宝八歳六月二十一日献物帳、北倉158）に「雑集一卷〈白麻紙 紫檀軸 紫羅襪 綺帶〉／右平城京御宇 後太上天皇御書」（〈 〉内割注、／改行）と記載されており、聖武天皇筆であることが知られる。仏教関係の詩文を抄録したもので、巻末には本文と同筆で「天平三年九月八日写了」との奥書があり、天平3年（731）9月8日、聖武天皇が31歳のときに書写しおえたことがわかる。天皇崩御後、その七七忌にあたる天平勝宝8歳（756）6月21日に、他の遺愛の宝物とともに、東大寺毘盧遮那仏に奉献された。

雑集にも、抑揚のある弾むような起筆、起筆部分や筆路に沿って現れる極めて細い筆線、筆線の割れなど、有芯筆による特徴を見ることができ、有芯筆で書かれたものと考えられる（おそらく兎毛が使われているのであろう）。穂先にとっても弾力があるようで、横画では、起筆の打ち込みの反動か筆線が波打ち、再度打ち込んでいるように見えるものもある。

雑集の書風については、唐の褚遂良の書の影響が指摘される。前掲『正倉院の書蹟』で示された内藤乾吉（1899-1978）の見解^{（註19）}がよく知られている（後述）。

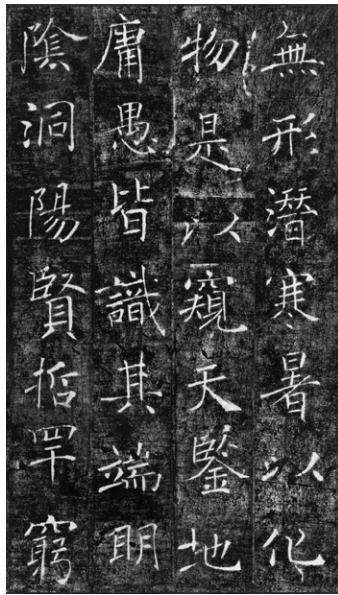
恵美千鶴子氏は、早くそうした指摘が見られるものとして、柏木貨一郎（探古。1841-1898）の稿本『東寺堂塔興廃表并記事等雑記』を挙げる^{（註20）}。同稿本は、藤本孝一氏により翻刻・紹介されたもので、原文は「清国楊守敬古書評語〈明治十三年、一見於浅草文庫〉／（中略）／聖武天皇宸翰雑集 一卷／此学褚何南書、甚雅枯樹賦一流也」とある^{（註21）}。藤本氏、また石井健氏の言うように^{（註22）}、明治13年（1880）に来日した清の楊守敬（1839-1915）の評語の部分である。



挿図13 北倉3 雑集（左：第44・45紙、右：第3紙）



挿図14 雁塔聖教序



挿図15 房玄齡碑

雑集は褚遂良（河南）の書を学んだもので、とても雅で枯樹賦の流れを汲むものであると述べられる。

内藤湖南（1866－1934）をはじめとして、王羲之の書の影響を認める見解もある^(註23)。荒井氏も王羲之の書からの影響を重視している。

以下ここでは、褚遂良の書に着目して、雁塔聖教序を中心に、雑集と比較していきたい^(註24)。

雁塔聖教序（挿図14）は、インドから仏典を請来して漢訳を進める玄奘（602－664）が唐の太宗と皇太子（後の高宗（628－683））から賜った序・序記を、褚遂良が書いた楷書の二碑である。序記の末尾に「萬文韶刻字」とあり、刻者も知られる。永徽4年（653）の建立で、陝西省西安市の慈恩寺大雁塔内に現存する。

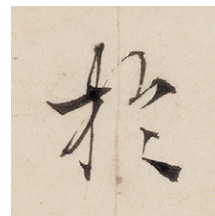
まず、内藤乾吉の見解を引いてみよう。「聖武天皇御筆の雑集は、いろいろの点で褚遂良の影響の濃厚に認められるものであるが、ことに誇張された遊糸を盛んに用いられているのはその著しいものである」^(註25)と述べ、「遊糸」は同じく褚遂良の房玄齡碑（挿図15）の「於」「檄」などや枯樹賦に多く見えると指摘する（挿図16）。



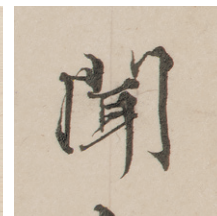
房玄齡碑



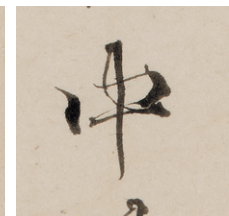
房玄齡碑



雑集



雑集



雑集

挿図16 遊糸

「誇張された遊糸」とは、極めて細い筆線のことであり、まさに有芯筆による特徴の一つである。後に、内藤乾吉が枯樹賦に代えて雁塔聖教序を挙げているように^(註26)、雁塔聖教序にも「遊糸」を見いだすことができる（挿図17）。



挿図17 雁塔聖教序にみられる遊糸

有芯筆による特徴としては、抑揚のある弾むような起筆も、雁塔聖教序と雑集に共通して認められる。「蓋」字の皿部分の第一画に注目してほしい（挿図18）。



雁塔聖教序

雁塔聖教序

雁塔聖教序

雑集

雑集

挿図18 抑揚のある起筆

筆線の割れも、雁塔聖教序と雑集のどちらにも見ることができる（挿図19）。



雁塔聖教序

雁塔聖教序

雁塔聖教序

雑集

雑集

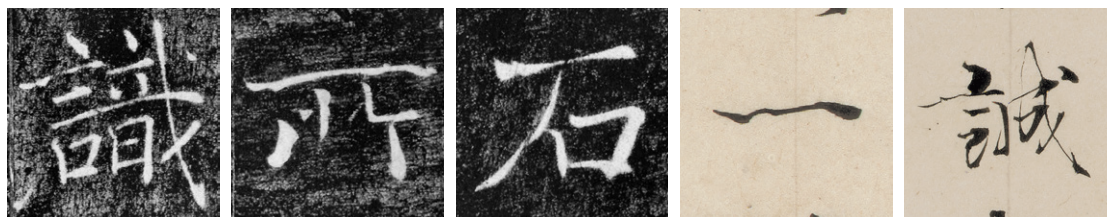
挿図19 筆線の割れ

このように雑集と同様に有芯筆による特徴が認められることから、雁塔聖教序も有芯筆で書かれたと考えてよいのではなかろうか。

ところで、雁塔聖教序の筆線には、補筆・修正したように見える箇所が少ない。早く、松田南溟（1860－1929）と比田井天来（1872－1939）が注目していたことが、その愛蔵の拓本に付けられた圈点から知られる（註27）。荒金大琳氏は原碑の調査・撮影から、それらが原碑に刻されたものであり、原碑にはより多く確認されることを明らかにした。荒金氏は、主として補筆は、褚遂良が行書表現から楷書表現への修正を図ったものであり、それを萬文韶がそのまま刻したのでとする（註28）。

近時、池田絵理香氏は、この問題をめぐる研究動向を整理した上で、雁塔聖教序が段階的に書写されたこと、特に細い仮書きと太い本書きによって書き重ねられていることを新たに提唱している（註29）。

ただし従来、雁塔聖教序で補筆・修正とされる箇所には、上述の筆線の割れも含まれている。また、起筆の打ち込みを繰り返す横画も補筆・修正の箇所として挙げられるが、類似した横画は雑集にも見える（挿図20）。



雁塔聖教序

雁塔聖教序

雁塔聖教序

雑集

雑集

挿図20 打ち込みを繰り返す横画

「誇張された遊糸」は原碑にははっきりと刻されており、その姿は雑集になおさら近く感じられる（挿図21）。



拓本

原碑

拓本

原碑

挿図21 雁塔聖教序（拓本・原碑）

このように雁塔聖教序において補筆・修正とされる箇所には、有芯筆の使用に起因すると考えられるものがある。すべてではなかろうが、用いられた筆を視野に入れた検討も必要であろう（註30）。

なお池田氏は、房玄齡碑にも補筆・修正したように見える箇所があることを指摘している。「遊糸」が見えることとあわせて、房玄齡碑も有芯筆で書かれた可能性があるのではなかろうか。



挿図22 雁塔聖教序（原碑）既出字例 ※数字は挿図番号

4. むすびにかえて

以上、正倉院の筆と書跡を起点に、用いられた筆の観点から、中国書法について若干の再検討を行った。正倉院の書跡だけではなく、中国の書跡にも有芯筆に由来する筆線を見て取ることができた。従来、個人あるいは特定の書跡の特徴のように理解されてきた書法・書風のなかには^(註31)、実は有芯筆による特徴もあるのではなかろうか。

筆の構造と書跡の関係については、服部誠一（1899－1986）^(註32)や安藤更生（1900－1970）^(註33)、徐邦達（1911－2012）^(註34)などに指摘があるが、今回の特別調査では、実証的にその関係を確認できたことに、大きな意義があろう。

最後に、その徐邦達の指摘に触れておきたい。宋の葉夢得（1077－1148）の『避暑録話』の「熙寧の後、世始めて無心散卓筆を用ふ。其の風一変す（熙寧後、世始用無心散卓筆。其風一変）」^(註35)の一節を引き、筆には有芯・無芯の別があることに注意を喚起している。続けて具体的な作例を挙げ、隋の智永の書とされる真草千字文（国宝、小川雅人氏蔵。以下、小川本を冠称）の「獸」字の草書などに見られるような右払いの収筆部分の突起状の筆線について、「当時毛筆有特種製法一有心的緣故」^(註36)と、当時の筆の特殊な製法、すなわち有芯筆によるものであることを指摘する。

このような収筆部分の突起状の筆線については、内藤湖南が静岡県牧之原市の平田寺に伝わる天平感宝元年（749）の聖武天皇勅書（国宝）にも見えることを指摘し、これを小川本真草千字文の書法の模倣・影響とする^(註37)。堀江知彦（1907－1988）は加えて、国家珍宝帳、平安時代の小野道風（894－966）の玉泉帖（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）にも見えることを指摘して、あわせて中国書法の模倣と論じている^(註38)。徐邦達に従えば、これらも有芯筆によると考えられようか。蘭亭序八柱第三本にも、右払いの収筆部分に似通った形状を確認することができる（挿図23）。



真草千字文

聖武天皇勅書（平田寺） 北倉158 国家珍宝帳

玉泉帖

蘭亭序八柱第三本

挿図23 収筆部分の突起状の筆線

『避暑録話』中の熙寧（1068～1077）は宋の神宗（1048－1085）の年号で、この後、無芯筆が使われ始めたという。この言を是とすれば、それ以前は、有芯筆を使っていたということになる。日本においては平安時代中期以前が該当する。中国の書跡だけでなく日本の書跡についても、そして漢字だけでなく仮名についても^(註39)、用いられた筆の観点からの見直しが求められよう。

有芯筆に限っても、その製法、使われる獣毛は必ずしも固定的なものではなく、時・所・人により様々な変化があったと思われる。もとより、獣毛の性質は常に一定とは限らない。また、

筆の機能を超えて表出される個人の特徴もあろう。有芯筆の機能、それがもたらす筆線の特徴については、さらなる解明・検証が望まれるところである。今後の課題として、いっそうの精査に努めたい。

(はしもと たかあき 國學院大學准教授)

付記

獣毛の形状・性質に関しては、藤野雲平氏・向久保健蔵氏に特に御示教を賜りました。記して、御礼申し上げます。

註

- (1) 詳細については、日野楠雄・荒井利之・橋本貴朗・藤野雲平・向久保健蔵「正倉院宝物特別調査 筆調査報告」(『正倉院紀要』第43号、2021年)参照。以下、本稿の用語もこれに従う。
- (2) 竹之内一昭・奥村章・福永重治・向久保健蔵・実森康宏・ジョリー ジョンソン・本出ますみ「正倉院宝物特別調査 毛材質調査報告」(『正倉院紀要』第37号、2015年)。
- (3) 攀桂堂は元和元年(1615)に京都で創業。同堂の巻筆の製法・構造については、日野楠雄編著『筆の源流 巻筆の世界—攀桂堂雲平筆四百年—』(攀桂堂、2015年)に詳しい。
- (4) 例えば、田淵実夫『筆』ものと人間の文化史(法政大学出版局、1978年)。
- (5) 安藤更生「毛筆の発達と書画様式変化との関係について」(早稲田大学『美術史研究』第1冊、1962年。同『中国美術雑稿』〈二玄社、1969年〉所収)。同論文では正倉院筆の構造を「巻き筆」とするが、製法については正倉院宝物特別調査(毛材質、筆)の成果とは見解が異なる。
- (6) 正倉院筆における兎毛の使用については、註2前掲報告参照。奈良時代の筆の多くに兎毛が用いられていたことは、杉本一樹「正倉院文書にみる筆の諸相—材質を中心に—」(『正倉院紀要』第43号、2021年)に詳しい。
- (7) 安藤更生註5前掲論文。
- (8) 荒井利之「正倉院所蔵の巻筆と書蹟」(『正倉院紀要』第43号、2021年)。以下、荒井氏の見解は同論文による。
- (9) 神田喜一郎「鑑真将来の二王の真蹟について」(『大和文華』第2号、1951年)、同「鑑真和上と書道」(『大和文化研究』第8巻第5号、1963年。『神田喜一郎全集』第8巻〈同朋舎出版、1987年〉所収)は、この王羲之・王献之の真跡を『唐大和上東征伝』に記載される鑑真請来のもものと推定する。
- (10) 神田喜一郎「正倉院の書蹟の概観」(正倉院事務所編『正倉院の書蹟』日本経済新聞社、1964年)、8頁。『神田喜一郎全集』第8巻(同朋舎出版、1987年)所収。
- (11) 杉本一樹「猷物帳の書に関する一試論」(『正倉院紀要』第21号、1999年。同『日本古代文書の研究』〈吉川弘文館、2001年〉所収)。
- (12) 八柱第一本・第二本・第三本を搨摸本と見るか臨写本と見るか諸説あるが、本稿では西林昭一『中国書道文化辞典』(柳原出版、2009年)による。
- (13) 魚住和晃『書聖 王羲之—その謎を解く』(岩波書店、2013年。岩波現代文庫、2020年)。
- (14) 啓功「『蘭亭帖』考」(同『啓功叢稿』中華書局、1981年。『啓功全集』第3巻〈北京師範大学出

- 版社、2010年）所収。日本語訳を中田勇次郎編『中国書道全集』第2巻（平凡社、1986年）に収める）は、これらのうち「𦵏」字を「賊毫」、「亦」字を除くその他を「破鋒」として指摘する。ただし「畢」字については、紙の損傷（底本時か）のようにも思われる。
- (15) 「蘭亭論弁」については、『蘭亭論弁』（文物出版社、1977年。一部日本語訳に谷口鉄雄・佐々木猛編訳『蘭亭序論争訳注』（中央公論美術出版、1993年）がある）、『金石書学』第3号・第4号（2000年・2001年）、菅野智明「さまよえる蘭亭像—蘭亭序論争に関する覚え書き—」（出光美術館編『書の名筆—高野切と蘭亭序』展図録、同、2002年）などを参照。
- (16) 『昭和蘭亭記念展』図録（昭和蘭亭記念会、1973年）、昭和蘭亭記念会編『昭和蘭亭記念展図録』（同・五島美術館、1973年）。
- (17) 西川寧「張金界奴本について—73・11・2 昭和蘭亭記念展講演—」（『書品』238号、1973年。『西川寧著作集』第1巻（二玄社、1991年）所収）。註16前掲図録のうち、後者にも収める。
- (18) 啓功註14前掲論文。
- (19) 内藤乾吉「正倉院古文書の書道史的研究」（正倉院事務所編『正倉院の書蹟』日本経済新聞社、1964年）。先立って、堀江知彦「正倉院の書—光明皇后の御書をめぐって—」（『南都仏教』第6号、1959年）にも褚遂良の影響との指摘がある。
- (20) 恵美千鶴子「天平の息遣い—聖武天皇宸翰「雑集」」（東京国立博物館ほか編『御即位記念特別展 正倉院の世界—皇室がまもり伝えた美』図録、読売新聞社ほか、2019年）。
- (21) 藤本孝一「柏木探古稿本『東寺堂塔興廃表并記事等雑記』」（『MUSEUM』東京国立博物館研究誌、第590号、2004年）。〈 〉内は割注、／は改行を示す。
- (22) 石井健「雑集と詩序」（大橋一章ほか編著『正倉院宝物の輝き』里文出版、2020年）。同論文には雑集に関する研究史がまとめられており、本稿も多く負っている。
- (23) 内藤湖南「聖武天皇宸翰雑集跋」大正十年十月（同撰『寶左龔文』1923年、『内藤湖南全集』第14巻（筑摩書房、1976年）所収）、同「聖武天皇宸翰雑集」（『支那学』第2巻第3号、1921年。『内藤湖南全集』第7巻（筑摩書房、1970年）所収）。
- (24) 註22前掲論文で石井氏が指摘するように、文字の大きさや石刻・拓本と肉筆という性質の異なるものを比較することに問題なくはないが、一定の有効性はあると思われる。
- (25) 内藤乾吉註19前掲論文、25頁。
- (26) 内藤乾吉「褚遂良の書法」（尾上八郎ほか監修『書道全集』第8巻、平凡社、1957年）。
- (27) 『書学院本 雁塔聖教序』（書学院出版部、1971年）、比田井南谷「あとがき」（『書学院本 雁塔聖教序釈文』書学院出版部、1971年）。
- (28) 荒金氏の見解は、荒金大琳編著『雁塔聖教序に関する記録』（啓照SHO出版部、2003年）にまとめられている。雁塔聖教序原碑の全字の写真は、荒金大琳・荒金治整理『唐褚遂良雁塔聖教序』（文物出版社、2007年）および程志宏・荒金大琳・趙帥編写『褚遂良 雁塔聖教序 原石・拓片・程志宏臨本・趙世駿臨本』『褚遂良 雁塔聖教序記 原石・拓片・程志宏臨本』（河南美術出版社、2017年）に掲載される。
- (29) 池田絵理香「「雁塔聖教序記碑」に見える複雑な刻線の考察」（『書学書道史研究』第30号、2020年）。以下、池田氏の見解は同論文による。
- (30) 例えば、仮書きと本書きの重ね書きと見た場合、なぜ仮書きが残るのか、それがなぜそのまま刻されるのか、疑問なしとしない。
- (31) 執筆法（筆の持ち方）と体勢に由来するとの見解もある。尾川明穂「巨碑の上に花開いた「雁塔

- 聖教序」の書法—隋唐石刻の書丹における執筆法の違いについて」(『墨』235号、2015年)。
- (32) 服部誠一「製筆技術の変遷と書体書風との関連」(『埼玉大学紀要』教育学部篇第4巻、1955年)。
- (33) 安藤更生註5前掲論文。
- (34) 徐邦達「談古書画鑑別」(北京『故宮博物院院刊』1979年第2期。林舒等選編『名家談鑑定』〈紫禁城出版社、1995年〉所収)、同『古書画鑑定概論』(文物出版社、1981年。『徐邦達集』1〈紫禁城出版社、2005年〉所収)。
- (35) 王雲五主編『避暑錄話』叢書集成簡編(台灣商務印書館、1966年)、10頁。註34前掲論文・書の引用では「世」を欠く。
- (36) 徐邦達註34前掲書、20頁。
- (37) 小川本真草千字文に付された内藤湖南の大正元年(1912)の跋文(コロタイプ複製『真草千字文』小川為次郎・山田茂助、1912年。『内藤湖南全集』第14巻〈筑摩書房、1976年〉所収)、内藤湖南「正倉院の書道」(飛鳥園『東洋美術』特輯正倉院の研究、1929年。『内藤湖南著作集』第9巻〈筑摩書房、1969年〉所収)。なお湖南は、小川本を国家珍宝帳に記載される「真草千字文」と推定する。
- (38) 堀江知彦「正倉院書蹟にみる和様の展開」(正倉院事務所編『正倉院の書蹟』日本経済新聞社、1964年)。
- (39) 仮名の書と有芯筆(卷筆)の関係については、服部誠一註32前掲論文のほか、村上翠亭『かなの疑問100』(芸術新聞社、2001年)、名児耶明「仮名の筆致と卷筆」(『書法漢学研究』第7号、2010年)などが、その重要性を提起している。神崎充晴「藤野雲平謹製「卷筆」を使ってみて」(日野楠雄編著『筆の源流 卷筆の世界—攀桂堂雲平筆四百年—』攀桂堂、2015年)では、現行の卷筆による検証が試みられている。

挿図出典(正倉院宝物以外)

蘭亭序八柱第一本・第二本・第三本

吉川蕉仙編『書聖 王羲之の書』(二玄社、2013年)

雁塔聖教序(拓本)

『雁塔聖教序』中国法書選(二玄社、1987年)

雁塔聖教序(原碑)

程志宏・荒金大琳・趙帥編写『褚遂良 雁塔聖教序 原石・拓片・程志宏臨本・趙世駿臨本』『褚遂良 雁塔聖教序記 原石・拓片・程志宏臨本』(河南美術出版社、2017年)

房玄齡碑

西川寧・神田喜一郎監修『唐・褚遂良 房玄齡碑』書跡名品叢刊(二玄社、1970年)

真草千字文

小川雅人氏蔵。石塚晴通・赤尾栄慶編『国宝小川本真草千字文』(勉誠出版、2018年)

聖武天皇勅書

平田寺蔵

玉泉帖

宮内庁三の丸尚蔵館蔵

図版掲載にあたり、ご協力いただきました各位に厚く御礼申し上げます。